

○穴生者來歴

明良洪範に云ふ。石垣を築くに、あのみ築といふ仕方あり。江州にあのみといふ處ありて、其所にて古より石の五輪石を切出し、其外すべて石切の上手多く有る處なりしゆゑ、信長公安土にて天守を建られし時、同國の事なる故に、あのみより石工を呼びよせ仰付られたり。依て諸國にて是を用ひしかば、次第に石垣の築方上手に成りて、後には五輪石をば止めて、石垣築の事のみを業としけり。以來は諸國にては通名により、石垣築者をばあのみといひならはしけるとあり。井澤長秀の本朝傳談に、石がきを築く者を阿野といふは、近江の阿野の者はじめて築きしより、阿野を以て石垣築きの名とすと、近江地志に見ゆ。俗に穴生とかくは笑ふべしといへり。平次按ずるに、あのみは、あなほを呼び誤りたるものにて、元は穴太と書きたるを、後あのみと呼べるにより、穴生と書きたるを、また誤りて阿野と書きたるなるべし。穴太は續日本紀に、天平勝寶四年七月甲子。下總國穴太部阿古賣。一產二男二女賜稗并乳母。といふこと見ゆ、姓氏錄に、志賀穴太村主などいへる姓を載せ

たり。此は則ち近江國の地名なる事いちじるし。近江より出でたる石工の穴生も、もとは穴太と稱したり。吾が舊藩祖利家卿の判書にて知られけり。後藤和陸の穴生石垣古實書に云ふ。夫れ石垣の古實は、神武天皇八十梟帥を討ち給ふ時、大和國城田といふ所に築き給ふ。是城の始とす。此時天皇宜ふは、神國の人民は神孫なれば、五行の積方尤成べしとて築かせ給ふと。抑、天地開闢のはじめは、野に住み山に住みけるが、寒暑雨露にくるしみて、後穴を掘りて住みけるとぞ。然るに、疾熱鬱症の憂ひあるをいとひ、家屋を作り住みけるといへども、神武天皇の頃までは、尙賤民は穴に住みけり。故に後世までも田舎に、石にて疊みたる穴窟あり。是の遺跡なりとぞ。さてその上古以來穴居せし賤民共の中にも、近江國坂本なる穴生村のものども、最初に柴の庵を結び穴窟より出でたりしゆゑ、其由縁を以て穴生村と名付たりといひ傳へたり。天正年中に、利家卿召抱えられし穴生源介・穴生又助なども、皆右坂本穴生村の産にて、石工を穴生と呼べるも、是より初れり。元祿元年二月下旬利家卿上方へ參勤し給ひ、利長卿へ被仰置、金澤

の城普請を命ぜられたり。當城は本願寺の末寺御堂ありし山屋敷にて、其初め堀・石垣等もなき山城なるを、此時初めて戸室山より大石を切出し、本丸・東丸を石垣に仰付けられしかど、兩度まで崩れ、利長卿難儀に思召處、利家卿開召し、篠原出羽を上方より御下し、石垣奉行にて、高石垣成就せり。慶長十六年尾州名護屋の城普請、關東よりの公役として、利光卿尾州へ被爲入、留守城代篠原出羽守なりしが、俄に惣構外堀を申付けられ、且城中の石垣をも築かしめられたり。此時人持衆・馬廻の諸士および百姓・町人までも加り、普請役を勤めたり。石垣は江州坂本穴生の石切二十二人宛にて、其頃は今云ふ百姓町・法嶋河原邊に河石夥敷ありしゆゑ、此石共を取來り、早速に出來せり。篠原出羽守は、大器の人なりと、一統感心すといへり。本丸・東丸の高石垣出來の後、利家卿御覽被成、甚喜悅し給ひ、最早要害堅固のよし、奉行中被申處、穴生石切の中に、道具を指込み随分登り可申と云ひける者あり。其者既に御成敗可被仰付との事なりしかど、其由承り出奔したるよし傳承す云々と。今按ずるに、右古實書にいへる近江國の穴生村

は、最初に庵を結び、穴窟より出でたる由縁を以て、穴生村と名付たりと載せたる傳説は、請けがたし。穴生村は、元と穴太村と書きたるを、後誤りて穴生の二字とせしもの也。湯淺祇庸の藩國官職通考に云ふ。利家卿越前府中を鎮護し給ふ頃、穴生源助を抱えられ、知行五十石を賜へり。穴生は苗字にあらず。穴生は近江國の地名にて、穴生・戸破等三ヶ村は、石工に名ある地にて、其石工を扶持せられ、穴生某・戸破某と其出所の地名を以て唱へ來り、其輩數人ありしかど斷絶して、纔に穴生源助の子孫のみ残り。源助の孫源次郎に至り、與源次郎と稱し、與を苗字とし、其子孫連綿して三家と成る。之を穴生方と稱し、石切の頭たり。但し後々までも穴生の者など呼びて職名とすといへり。平次按ずるに、穴生源助を抱えられしは、越前府中にての事なりしが、其の家に傳來せる判書は如左。石川・河北兩郡の内を以、百俵之所令扶助訖。全可知行者也。仍如件。

天正十五七月十六日

利家卿

穴太源介所